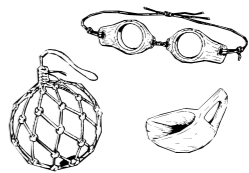


# 遺された道具と想い



遺された道具を、守り続ける人たちがいます。喜納兼稚さんと、城野豊さん。故上原謙さんの意志を継ぎ、資料館を支えるお二人に話を聞きました。守り続けるのは、道具と、そこに込めた想いでした。

## 資料館がほしかった

—喜納さん

謙さんはいつも言っていた。「糸満には、資料館がない、絶対に必要だ」。

道具をいっぱい集めて、自宅で展示までしていた。それでも、ちゃんとした資料館を造りたい。その口癖を何度も聞いた。

話をしているうちに、自然と、じゃあ一緒にやろうか、となった。そう伝えて、役所に何度も足を運んだ。お願いして、お願いして、ようやく役所が資料館設置に向けて動いてくれた。役所から借りた倉庫は、周りに布団やゴミが積まれていた。

当時、担当してくれた役所の職員と2人で全部運び出してきれいに片付けた。そこから資料館は始まった。

## 受け継いだ、あの人の道具

—城野さん

最初は謙さんが作っている様子を見ながら、見よう見まねでミーカガンを作っていた。本格的に作り始めたのは、謙さんが亡くなってから。謙さんが使っていた道具を、奥さんからそっくり受け継いだ。「これで作ってね」。そう言われて。

ミーカガンは、教わって作れるものじゃない。見て、削って、自分の感覚で覚える。それしかない。謙さんが作っている手元をイメージして、自分でガラスを削ってみる。その繰り返し。作っているうちに、ふと気づく。ああ、謙さんは、ここにこういう工夫をしていたのか、と。声に出して教わったことは一度もない。それでも、手を動かしている、謙さんの工夫が、すこしずつ伝わってくる。



NPO法人ハマスーキ理事長

喜納兼稚さん

## 歴史を覚えている人が必要だ

—城野さん

資料館にある道具の手入れなら、誰にでもできる。道具は、手入れをすれば残る。だが、この道具が何であり、どう使われたのか。それにまつわる記憶は、覚えている人がいなくなれば、消えてしまう。私たちハマスーキがなくなれば、ひとつひとつの物語を知り、語れる人はいなくなってしまうと心配している。継いでくれる人がほしい。だが、こちらから頭を下げて、来てもらうものではないと思う。知識や技術は教えて身につくものではない。自分で覚えたい、自分の手で作りた。そう思っただけならば、続かない。だから、そのような人が現れるのを待つしかない。

それでも、希望はある。毎年、春先に市内の小学生たちがこへ来る。道具の前に立ち、私たちの話には、じっと耳をかたむける。あの子たちの誰かが、いつか、と思う。

だからこそ、多くの市民に知ってほしい。そして、まずは、見に来てほしい。

## 糸満を誇れることが願い

—喜納さん

国の宝になったと聞いて、まささに思った。「ここまで、よく来たな」と。

謙さんには資料館を作ることと、もう一つ夢があった。玉城保太郎の銅像を、この糸満につくること。「作ろうな、作ろうな」。それは謙さんと私たちの共通の夢もあった。なんとか頑張っ作ろう。何度もそう言い合っていたから、いまでも胸に残っている。「国の宝になったから、次は銅像だ」。謙さんに、そう報告したい。

ただ、その前にやりたいことがある。多くの道具を展示・保管している施設の整備だ。それ



NPO法人ハマスーキ監事

城野豊さん

は謙さんが、生きているころから言い続けていたこと。

そして、糸満に住む皆さんがこの施設に来て、見て、触れて、海人の道具たちが何かをまずは知ってほしい。そして、多くの人で未来へつないでいきたい。「糸満はすごい。ミーカガンが、いまのゴーグルのもとになったんだ」。

そう言って多くの子どもたちが、胸を張れる。それが謙さんと私たちの変わらない願い。

## 糸満って、すごいだろう。

子どもたちが、そう自慢してほしい。

